

雑詠日記

海蝶息音

卷の五

二〇一九年

谷川
修



今年も雑詠日記を冊子にする時期になった。自省して見れば、凡人は代り映えのしないことを続けるものだ。ところで最近、エピクテトスの『要録』の中に次の言葉があることを知った。剛毅な哲学者はめったに聞けないこんな勧告をしている。

いつも延期に延期を重ねるならば、きみ自身はそれと気づかずに、進歩することなく、生きても死んでも、ただの凡人として終わることだろう。

だから君自身、もう、できあがった、進歩したものとして生きることを、甲斐あることと思うがいい、そしてすべて最善と思われるものを、きみにとつての不可侵の法則とするがいい。・・・

きみはたとえまだソクラテスでないと、少なくともソクラテスたらんとしているかのように生きるべきである。

効用があるかもしれないと、愚かなわたしはそれにのせられそうになっている。老いと、身に不相応なこんな言葉にもすがりつくようになるのだ。

一月二日 運命の足音を聴き黙思するあとどれほどのことができるか

一月三日 厳冬の峰々映す絶景を畏怖するものは命ある者

NHK放映の、ドローンから映した穂高の峰々と周囲の連峰の映像。

一月四日 初仕事終えて海見る手に黄菊

一月六日 身を潜め月は日を食う初仕事

(孫と電話)

一月十五日

三日前はペンキ屋だった

林檎守りしたのはおおといだ

きのうは梨と李のお守りでさ

今日は今日とて桃に桜桃・杏守り

次には柿と葡萄がお守り待つ

グミにイチジク・アーモンド

みんなが散髪待っている

夜、先日録画したイギリス映画『アンコール!!』を観た。よい映画だった。潤む目で製作参加者名の行列を眺めていると、流れている曲の歌詞が字幕に出た。よい句がある。

わたしたちの人生は自分で描いた絵

わたしたちはみんな未完成の歌

人名の行列のうしろには楽曲の名が続き、エンディングの曲名が「Unfinished Songs」であることに気づいた。まことに、今日のわたしの歌が完成にほど遠いことを知る。

一月二十一日 霜の野を朝陽が照らす厳肅さ

街道を行く人徐々に気に満ちる

一月二十七日 切りつめて百日の紅を期す庭師

一月二十八日 友からの手書きのはがき寒なごむ

一月二十九日 冬の作務終えて間引いた白梅の花よ開けと石臼に挿す

二月三日節分

南から季を分かť風、ししを食う

(海・道の駅で猪汁のふるまい)

二月四日立春

時のめぐり合わせ

昨晚、細君が今日のために離れの床に「春入千林所々鶯」という掛け軸をかけた。つられてわたしも、表座敷の床の間に「春水蘆根□鶴立」の軸を掛ける。七つの淡い模様の上に隸書体で書かれた書で、五文字目の□は前から読めなくて困っていた。今日は思い立ってインターネットで調べてみて、画像の集まりの中に同じ文字の句を見つけた。やはり、「翰」の字形で「羽」の部分が「目」と書いてある。だが、検索して出てくるのは中国語で書かれたブログだけで、まだ読めない。そのうち墨跡を紹介したらしい文に□を「朝」とする記事が見つかった。□は「朝」の字かもしれない。画像に出てきた書にはこの七言と対になる句「夕陽楓葉見鴉雛」が並べてあった。じつは、わが家にはこちらの句の掛け軸もあって、二つの掛け軸は瀋陽でもらったものである。「鴉雛」が「鴉飛」と書かれているけれども、鴉は鴉(カラス)の異体字ということだから、文意は同じである。立春に、「春水蘆根□鶴立」の方だけを掛けたのは、「夕陽楓葉見鴉飛」が秋の印象を与えるように思ったからである。

探索はおもしろい成果をもたらした。この対句はもともと敬愛する蘇軾の、同じ四文字(孫門翻元)で押韻する二首の律詩のうちの第二首にあったのだ。

二 不用長愁掛月村

檳榔生子竹生孫

一 老去仍棲隔海村

夢中時見作詩孫

新巢語燕還窺硯

旧雨來人不到門

天涯已慣逢人日

歸路猶欣過鬼門

春水蘆根看鶴立

夕陽楓葉見鴉翻

三策已應思賈讓

孤忠終未赦虞翻

此生念念隨泡影

莫認家山作本元

典衣剩買河源米

屈指新筍作上元

書の軸で元の詩の「看」を「朝」に変えたのは次の句の「夕」と対照させたと見える。それだと、二句は朝と夕べの情景を歌うことになる。ところで、この詩は、「春水蘆根□鶴立」の句をキイワードにして中国語の「維基文庫」で見つけたのだが、「夕陽楓葉見鴉翻」の句による探索はもう一つの詩を挙げた。唐の陶峴という人の詩「西塞山下迴舟作」で、第五・第六句に「鴉翻楓葉夕陽動、鷺立蘆花秋水明」とあった。蘇軾の詩は本歌取りをしているのである。考えてみれば、漢詩も和歌と同じく昔の秀句を変奏することをしてきた。宋代第一の詩人とされる蘇軾は教養が深く、自然に古句を詠み込むことが生じる。二つの詩を比較すれば、元は秋の詩だったものを、蘇軾が春の詩に変えたことが知られる。この詩がつくられたのは一一〇〇年旧暦の正月七日と分かっている。場所は海南島。第二句の檳榔が教えるようにそこは亜熱帯にある。蘇軾が見たのは鷺ではなくて鶴の一種で、「楓」も紅葉する種とは違うかもしれない。むしろ、蘇軾はその場の実景を詠んだのではないか。「看」と「見」は二つの文字に書き分けただけで、夕陽の句と対応させるために前の句に朝をもつてくる必要はなかったのだ。そう考えると、第六句は少し寂しいけ

れども、詩を、太陰太陽暦の正月蘇軾が静かに見つめている情景としてよいことになる。このとき蘇軾は六十五歳。中国の最果て海南島にいたのはそこへ流されたからである。近世のような宋代にも政争があり、そこへ流された人の中にはマラリアに罹つて果てた人もいた。一對の掛け軸は鶴と鴉のいる情景が好まれたことを教えるが、じつは、第三句に出る燕が鶴や鴉よりも蘇軾の心をとらえているのである。寒い時期に北から南へ渡る燕は温かくなれば北へ帰つて子育てをする。第三・四句は、旧知のいない土地からの北帰行の願いを表現しているのだ。蘇軾は、翌年一一〇一年に赦免されたけれども、北へ帰る途上で亡くなった。この詩に愁いが漂うのはやむをえないだろう。しかしわたしは、明朗さを失わなかったあのしなやかな精神を見習いたいと思う。

蛇足を付け加えれば、細君の掛け軸の句は、元は「春入千林所々花、秋沈万水家々月」という禅の言葉だったのを、千宗旦が、上の句の月並みな「花」を「鶯」に変えて揮毫したのだという。鶯がいるところ花がある、という工夫だろう。その「春入千林所々鶯」の軸は、表千家の初釜の床にかけられる慣例になり、流れ来て浦の苦屋に掛かっている。

さて、雨を交えて内海に白波を立てた昨日の南風も去って、今日は一陽来復の春である。

石臼に砂糖を入れて梅咲かし花咲かじいさ笑み咲かす

五日己亥年元日

昨日から詩句の林に入つて遊んでいた蝶が、今日、蘇東坡の詩に和して
四聯八句の文字列を紡ぎ出した。

老婦仍棲天涯村

海至世界白濁邨

(白濁邨は家山)

已慣課植平靜日

朝陽出山入東門

(課植園に旧雨來ること少なく)

春海白浦青鷺立

松葉紅梅綠鳥翻

(緑の鳥は目白、花に鶯とは限らず)

布衣年々樂人生

苟日々新遊本元

(買入れできる衣のない下戸の遊樂)

四声を知らない天涯の野人は、詩のまねごとをしても相変わらず平仄を無視し、訓み下して歌うことしかできない。平靜な生き方はモンテーニュの勧める徳目だが、インターネットが言う、出山は仏教でゴータマ・ブッダが修行を終えて山を下りたこと、西方浄土の入り口は東の門、と。わが庵が内海に面し東岸に岬の山並みを望むことを表現したら、思いがけず喜ばしい境地を詠う詩に近づいた。

二月八日

悪声で鶇が歌い寒戻る

(軽やかな美しい姿で)

二月十七日

ナマコ獲る舟を捨ておき鶇は家路

二月十八日
果樹の枝燃やし田夫はどんど焼き

青鷺の夫婦円舞し春暮れる

二月二十一日
野良生えの花挿す花器に余寒あり

(銅製の花器)

三月三日
春雨や、旅に備えて集う鴨

色が地味で首が長く雁行したから雁と思ったが、鴨だったのだろう。

三月五日
人工の磯で千鳥がワカメ見る (残念ながらここはテトラポッドの岸边)

三月十一日
長生きをすると、

人生の諸相を目の当たりにすることが起きる
人の命の終焉のありさまのいくつかも。
しかしそれを自分に当てはめて

予めとらえることなのだとむずかしいことか。
散文でしか考えることのできないことを

分かち書きしてみても……

辞世の歌は死に臨む感慨を表出することしかできないだろう。

三月十三日

雷鳴に目覚め、ふたたび春の夢

三月十八日

エンドウも雑草、草抜く田夫には

(それがカラスのものとあれば)

三月二十四日

蜃気楼イスラム国は滅亡しいまだ歴史は陽炎の中

対岸といかに関係結ぶかが歴史であつた島国今も

(極西と極東の島)

三月三十日

ひきこもり百万人を超える国誇る首相のことばは虚飾

四月一日

ひとしきり二文字の意味を話題にしまだ年号のある国に住む

四月十五日

天運に委ね正気を捧げ持ち一角犀のごとくに歩む

四月十六日
炎上げパリの尖塔燃え落ちる歴史を啓示するがごとくに

四月十八日
ふくろ実を海に流して健やかな李の実り祈る日を得る
(風邪が癒えた)

四月二十三日
若葉見る、食道炎に苦しんで
身をもつて知る人のはかなさ
樹下の巖に春雨が降る

四月二十四日
まだ胃炎・食道炎に苦しみながら、わずかに『世界五月号』の伊東光晴の
論考「アベノミクスの病理の淵源」を読んだ。九十二歳の人がこの国の無残
な病理を見つめ、行く末を心配している。

不学者が権力握り上下みな責務果たさず国衰える

こぎれいで精神心情底浅い世間見つめる眼くぼませ

四月二十七日
陽光に少しめまいし瘦身の園丁果樹に実つき尋ねる

四月三十日

山川を越える旅路に今は古い若葉にぎわう峠を下る

表層で世は事もなし四月尽

社会のさまざまな力がせめぎあい、奈落の底の大きな歯車をわずかに回すようにして、歴史の舞台上で散発的な出来事が生じる。渦中であって短期的な視点しかもちあわせない者は、歴史の動向を正しく見通すことができない。ただ肚のすわった人物だけがその有為転変を冷静に見つめることができる。

五月一日

老身は岩場の泥に阻まれて久住の山を遠くに拝む

久しく住むべき境地に至るはずだった者に代わって孫が登頂。

五月六日

世をあげて流されるさま批判する投書があつてわずかに安堵

五月九日

とりどりの緑の山の裾を行く列車の音が海越えて来る (ただ一輛)

五月十一日

田園を歩き傷いやす麦の秋

五月十七日

八十年経て安住の額に入り時呼びもどす父の描いた絵

わが家に父の描いた絵がある。子供のころからあったのを、退職して帰省後に居間に懸けた。その水彩画は色あせ、古い額からして絵がやっと入るほどの窮屈さであった。一昨日、ふと額を新調しようと思ひ立ち、絵を取り出したらおもしろい発見に顔がほころんだ。絵のうしろにあったのは家族の写真、と言っても平凡な家族ではない。写真を保護する表面の紙に「皇太子殿下御誕生記念」と書いてある。写真の中央に昭和天皇夫妻と誕生して間もない皇太子の肖像があり、右と左の両側に明治天皇夫妻と大正天皇夫妻の肖像。下側には皇太子の姉でおかっぱ頭のまだ幼い三人の内親王の姿もある。写真は八十五年前の時代の雰囲気をよく映している。乳児だった皇太子は四十五歳で即位し、八十五歳の今年退位して上皇となり、昔で言えば院に住まうことになる。この写真を今見れば、背後に多難だった日本の歴史を回顧し、家族のあり方にまで及ぶ文化の変遷を知ることができる。なかなか貴重な写真が残ったのは、写真の額が絵のために流用されたせいだろう。

今年その写真が見つかったのは、たまたま体調不良になって老いを感じ、父の絵のくたびれた額をどうにかしようと思ひ立ったからである。去年みやげ物の絵を入れる小さな額をつくってもらった店にまた行った。主は柔和な物腰で人品卑しからぬ人である。年齢を尋ねたら、「八十二歳です、さいわい目が衰えずミリメートル単位の細工もできます」、と朗らかな答え。こういうふうな歳をとりたいものである。仙洞院とほぼ同世代なのだ。

新調した額に入つて装いを新たにした絵は、色はあせたままだけれども光を増して、そこに描かれた昔の風景をよみがえらせた。左手前の小屋の軒下には草花が見え、背景に低い山が広がる。その中間の右手のこんもりと盛り上がったところに人影がある。そこは、以前「原」と呼ばれていた広くもない田園である。今は家が建つて畑がわずかに残るだけ。奥に描かれた海岸近くの山の周辺には、昔、すくも塚と呼ばれる古墳群があった。それらの横穴式墓室から、耕地の少ないところには不相応なぐらいの発掘品が出土したという。絵にある盛り上がった場所は、平地に築かれた古墳の一つなのだ。秋に描かれたのか絵はその田園を黄色の色調で描き、古墳は名のとおり「すくも」を積み上げたように見える。ただし、人影にくらべると、もみがらをそんなに積み上げる気を起させないほど大きい。市内のほかの場所にある弥生時代の遺跡では、日本列島で四本しか見つからない有柄銅剣も出土している。海沿いの山勝ちな郷土に古くから人が住んで、まんざらでもない社会を営んでいたということである。絵はそういうことまで想起させる。

父は若いころ絵を描くことが好きで、その絵を描いたのは二十歳前のことだと思われる。歳をとつてからまた筆をとることがあったが、くらべると、昔の絵の方が軽やかな筆運びだと思ふ。元の額には内務省に届け出たと書いてある天皇一家の写真が入っていたから、絵が描かれたのはそれからほどなくだとしても、その額に入れたのは写真が配布された時期と異なるだろう。画用紙帳にでも保存して、額に入れたのは、敗戦前後の一年のうち

わたしが生まれ幼い兄が死にさらに祖父母が亡くなっているから、そのすぐあとぐらいたろうか。時を呼びもどした水彩画はハーフボードの上の壁に移した。その左手には、孫が草花をデッサンして彩色をほどこした小さな絵も懸かっている。こうして居間には、わが家の四代の移り行きの目印として二つの絵がある。食堂でもあるその部屋で、ときどき、幾層もの時間の経過に思いをめぐらせることになるだろう。

五月三十日

ざくろ咲く日和喜ぶ赤手蟹

五月三十一日

海藻も老いて変色春が逝く

六月六日

「雑詠日記に記すべき詠嘆には程遠い嗟嘆」

この列島の人々の暮らしがくずれていく／文化が心情を失い薄っぺらになっていく／復古を唱える者たちがそれに拍車をかける／しかし、古人がつくり上げてきた社会や文化はこんなものだっただろうか／人々はもつと自然と人間のあり方を見ていたのではないだろうか／日本語は豊かに真実を表現し美しくなかっただろうか／人間と文化にもっと品性があったのではないだろうか／

六月七日

雨やんで蝶とサツキが浮かぶ池

曇天にカッターを漕ぐ声上がる

六月十三日

梅雨入りを阻む寒気も抑ええず静かに出づる蓮の蕾を

六月十四日

晴耕でわずか四つの李得て、雨読で学ぶ徳あるすべを

六月二十一日

しんしんと血の巡る音臈月闇

(喉が痛む)

六月二十二日

小鯰釣る舟影にじむ降る霽に

(気温が低くまだ梅雨入りせず)

七月二日

合歓が咲く昔山賊の出た峠

七月三日

黄金虫食い散らかすな葡萄の葉

(食い飽きたマメコガネは交尾)

七月四日

夏風邪をやっと克服老人はわずかに為してひと夏を越す

七月十一日 荒れ畑の老夫を囁す赤とんぼ梅雨の晴れ間にまだ蟬鳴かず

七月十七日 自足して祝福受ける蓮の花
(直径 60cm の蓮田に花二つ、蕾が一つ)

貴婦人が花卉を閉じて揺れる午後

七月十九日 草木寄せボールも一つ濁る海

七月三十一日 ホルンフェルス悠然と見る夏の海
(永い時経た地層にも夏の一日)

法師蟬の音が染み入る断崖の地層幾重も変成果たす

八月三日 「碁に勝った」孫の報告暑氣払う

八月八日 八日月残暑に中る日本晴れ
(あたる 立秋、炎暑)

八月十一日 無花果が早にあえぐ、やれ、水をやれ

八月十八日

花芙蓉潮位の高い海を見る日と月巡り秋の氣来す

行く年月を一日に咲き閉じる花が見ている。

八月二十四日

蟻螂が兜に入る野の戦

八月二十五日

口開けて「瑞風」ながめ汗ぬぐう

(田夫がそれに乗ることはない)

夏越した疲れを癒す布袋草

(秋風が吹きやっとな人の布袋が動いた)

帰宅した門かどに雲水キリギリス

八月二十九日

秋雨が我が海染めて泥河とす

八月三十一日

悟りえず日日が是れ好日と、天地しず肅まり八月が尽く

映画「日日是好日」を観た。主演黒木華、去年亡くなった樹木希林も好演。

九月十日

「片州の田夫、秋氣に賦す」

ピアノ曲聴いて傷心慰める
この身離れぬ未熟かみしめ
月仰ぐ種よ頭上げ光待て
清らかな氣に満たされるまで
起伏ある地球の上のこの生で
味わうことは無上なるべし
歌仙卷け三十六と限らずに
見ること尽きずあの渡しまで
・
・
・
・
・
・
・

九月十六日

朝刊「折々のことば」（鷺田清一選）。「われわれはすべて弱さや過ちからつくりあげられている。われわれの愚行をたがいに宥しあおう。これが自然の第一の掟である。∴（人はみな）脆弱で無定見であり、不安と誤謬に陥りやすい」。ヴォルテールほどの人がこう思う。

狂い咲く椿が枯れる乱気象

九月十九日

花を摘むりんこの下で栗拾い

コスモスの中で下草抜く修行

九月二十一日

雨に濡れ紅白の萩風を予知

九月二十二日

台風の中で独り居友は蜘蛛

九月二十九日

腰たたき息継ぎながら栗拾う天の恵みの成果は小ぶり

十月二日

菓子箱の底に金貨の贈り物下手な芝居が現実の世よ

鞭で打てあきれるほどの犯罪を生む頽廢を共にする身を

十月四日

枯れ蓮や狐の嫁入り晴れやかに

十月十一日

青天に紅玉の実が破顔する

十月二十一日
ツワ一花生けて光を増す書房

十月二十三日
朝陽浴び網戸で座禪キリギリス

十月三十日
暮れ急ぐ空を雁行き、風ぐ海に鳥船帰り、歌を促す

十月三十一日
いすくんで燃える首里城見る眼

十一月一日
遠い国の山々燃える映像を目にし見上げる土降る空を

十一月三日
石塔のいただきに立つジョウビタキ深まる秋を身に体現す

十一月九日
王朝の移行を探り史書を読み柿植えて待つ次代の実り

十一月十一日
柘に先駆けて咲く椿あり世界は実に堅固ではない
(今は人新世)

十一月十五日
東南の谷に日の出が輝けば、海に日の道、西に月照る、うまし有明

十一月二十四日 釣り糸を垂れて小春を惜しむ人

十一月二十六日 沈潜する水鳥と息競い合い小春も暮れる海を見つめる

十二月五日 友人に紅葉狩りに行こうと誘われて長門峡へ

木の葉散る淵は静まり底明かり断崖すでに紅葉残さず

十二月九日 姫りんご一輪咲けばわたしもとサツキのつぼみ冬の陽だまり

十二月十日 湾の奥冬の寄り合い鶺鴒が三羽 鐵路行く車輛は一つ客一人

十二月十一日 細胞の病が器官侵害しやつと心が晩年と知る

培養されていた前立腺の組織の十三片中四つが悪性のものであった。翌日、骨と内臓の検査を受けた。骨の検査前に 22 と表示した部屋に入ったので尋ねたら、使う放射性元素はテクネチウムということ。原子番号 43 の原子核 99m を利用するのだ。帰って調べたら、陽子数 42 の原子核 ^{99}Mo が電子とニュートリノを放出してできる $^{99\text{Tc}}$ の励起状態（スピン $1/2^-$ ）は、ガンマ線（光）を放出して基底状態になるのに半減期が6時間もか

かる。それをヒトの骨の代謝に使われる物質と結合させて、血流に入れれば、ほどなく骨の中で活動の盛んな癌細胞のあるところに余計にそれが蓄積する。そこで、癌細胞があるかどうか、出てくるガンマ線を検出して得られる画像の濃淡によって判るのである。原子核^{99m}Srのエネルギー準位を計算したことのあるわたしは、まんざら縁のないわけではない』の同位体にお世話になったわけだ。おもしろいめぐりあわせと思うけれども、こんなことを情緒が大切な雑詠日記に書きつけるのは愚の骨頂。

十二月十七日

骨格の代わりに脳が輝いてこの身心のあり方を問う

(径3cmの髄膜腫)

弁天島猫とみすずの碑が守る

十二月二十一日

元肥に蛙起き出る果樹の畑

十二月二十四日

草紅葉豊かに光る街道を身体の像携え走る

十二月三十日

この岸に死すべき者として生まれ

時を経て、生き方未だ究めえず

晦日の入日背に彼岸見る

十二月三十一日 寒波寄せ鱒となまこが到来す

大つごもり彼岸の使者の青鷺と無事に年越す挨拶交わす

二〇二〇年 正月
白江庵 謹製



『春雨物語』 「目ひとつの神」

上田秋成

すべて技芸は、よき人のいとまに弄ぶ事にて、つたへありとは云はず。上手とわるきけぢめは必ずありて、親さかしき子は習ひ得ず。まいて文書き歌よむ事の、己が心より思ひ得たらんに、いかで教へのままならんや。始めには師とつかふる、其の道のたづき也。たどり行くには、いかで我がさす枝折のほか、習ひやあらん。……よく思ひえてこそ、おのがわざなれ。

